

『恋する女たち』と第一次世界大戦

——人間性の退廃——

萩原美津

1. はじめに

D. H. ロレンス (1885-1930) の中期の名作、『恋する女たち』は第一次世界大戦の真只中、1916年に執筆された。この小説と第一次世界大戦との関連については、これまで多くの批評家が論じてきた。例えば、Graham Holderness は、「戦争は単に背景であるだけでなく作品の暗黙の主題 (unspoken subject) である」と述べており、¹⁾ H. M. Daleski は、この小説を「ある意味では、戦争小説である」としている。²⁾ 史実に基いた「歴史」としては描かれていない戦争が、自律性を持った「物語」にどのように投影されているのか、本稿で検証する。

I

ロレンスは1919年に記した“Foreword to *Women in Love*”の中で、「戦争そのものを扱ってはいないが、この小説の最終的な形が整ったのは戦争の真只中である」ということと、「戦争のむごさ (the bitterness of the war) が当然のものとして、登場人物の中に表れるように、小説の中の時を固定したくない」ということを述べている。

...it is a novel which took its final shape in the midst of the period of war, though it does not concern the war itself. I should wish the time to remain unfixed, so that the bitterness of the war may be taken for granted in the characters.³⁾

「時を特定しない」という作者の意図が、ここに明かされる。確かに、『恋する女たち』において、春から冬への季節の移り変わりが感じられるのは、具体的な日付においてではなく、風景や草花の描写においてである。しかしこの小説には、時代を窺わせる数多くの記号が見て取れる。「フューチャリスト」*(74) や、伝説的ロシアバレエの踊り手「パヴロヴァとニジンスキー」*(91)、「ピカソ」*(255)⁴⁾ 1916年にアメリカからイギリスに入ってきた女性誌「ヴォーグ」⁵⁾ (372) などである。絶え間ない鳥の囀りからグドルーンは、人々に向かって声を張り上げる「ロイド・ジョージ」(264)を連想する。グドルーンの独白には、1916年4月のダブリンにおける「イースター蜂起」に呼応しているように思われる個所も認められる。(419) また、バーキンがジェラルドの亡骸を前に “I didn’t want it to be like this.” (479) と繰り返す姿に、アーシュラは、ドイツの “Kaiser” の姿を重ねている。⁶⁾

上記のような記号がなくても、作品の端々に、戦争の影は見え隠れする。一例は、第14章 “Moony” において、静養先のフランスから戻ったバーキンが、アーシュラと会話を交わす場面である。

I [Ursula] looked at England, and thought I’d done with it.

“Why England?” he asked in surprise.

“I don’t know it came like that.”

“It isn’t a question of nations, ...France is far worse.” (249)

この一節の最後で、バーキンが何気なく口にする「フランスはさらにひどい状態にある」というくだりからは、フランスが第一次世界大戦の戦場であったという事実が想起される。同じ章で、アーシュラがバーキンに “Do You love me?” と、問いかけるシーンにも、戦争を感じとることができる。

“Do you really love me?” she said.

He laughed.

“I call that your war-cry,” he replied, amused.

“Why!” she cried, amused and really wondering.

“Your insistence your war-cry—‘A Brangwen, A Brangwen,’—an old battle-cry.—Yours is ‘Do you love me?—Yield knave, or die.’” (251)

この二人のやりとりは、可笑しみが感じられる場面で、第一次世界大戦と直接結びつくとは言えないが、“war-cry”という言葉が使われていることで、自然に、戦争へと思いがゆく。

第17章、“The Industrial Magnate”における労働者の描写⁷⁾にも、また、戦争の影は認められる。日露戦争を通して、約100万発の砲弾が、日本軍によって使われたのに対し、第一次世界大戦ではソムの戦いだけで、約2000万発が使用された。⁸⁾ それは、「物量」の戦いであり、「生産力」の戦いであった。“The Industrial Magnate”の章に見られる、機械化された工場、以前より苛酷な条件の下で、黙々と働く労働者像には、戦時下に、軍需産業に駆り出された人々の姿を、重ねることも出来るのではないか。

『恋する女たち』が起稿された1916年は、英国史上初めて徴兵制度が導入された年である。各国の総力戦へと発展した第一次世界大戦には、「毒ガス」や「戦車」も登場してくることになる。1916年、7月から11月まで続いたソムの戦いでは、初日だけで5万7千人、延べ40万人の兵士が失われた。英国軍には、約900万人の兵士が動員され、90万人が戦死した。第一次世界大戦を通して戦死した兵士はおよそ800万人で、負傷者は2000万人にのぼり、約660万人の民間人も犠牲者となった。⁹⁾

ロレンスは第一次世界大戦を歴史の当然の成り行きと見做し、「近代西欧文明」を築き上げ、支えてきた「伝統的価値観」(キリスト教的人道主義、プロテスタンティズム、近代合理主義、資本主義、ブルジョア・リベリズム、etc.)の総決算が、この大戦に結果したと捉えた。¹⁰⁾ それ故、戦後ロレンスが目指したのは、「古きよきイギリス」への回帰ではなく、全てを一旦、御破算とし、過去と完全に断絶した「ユートピア的新世界」における「再生」であった。

著者自ら、“purely destructive”/“destructive-consummated”と称した¹¹⁾

『恋する女たち』を支配するトーンは、前作の『虹』のそれに比べ、格段と暗い。これには戦時下にロレンスが置かれた状況が、大きな影を落としていると考えられる。挙国一致体制の下で制定された DORA (The Defence of the Realm Act) に基く強い言論統制政策の影響で、1915 年 9 月に出版された『虹』は僅かその二ヶ月後に、発禁処分となる。そのため『恋する女たち』執筆当時、ロレンスは経済的に逼迫しており、出版可能な作品を創作する必要があった筈である。しかし『恋する女たち』の出版される見通しの薄さを、ロレンスはその初稿を書き終えた 1916 年の 11 月に、既に予見している。¹²⁾ 時代のイデオロギーが許容する枠組みに、この小説が収まらないことを察知しながらも、ロレンスが戦時下のイデオロギーに迎合することはなかった。その結果、この小説の出版は、アメリカ版の初版が出た 1920 年（イギリス版は 1921 年）まで持ち越されることになる。¹³⁾

1915 年末からはコーンウォールに移り住むが、妻がドイツ人であることから、1917 年にはスパイ容疑で家宅搜索された上、強制退去させられ、退去先のロンドンでも監視下に置かれることになる。三回に及んだ徴兵検査では「非人間的扱い」を受けた挙げ句、ことごとく「役立たず」の烙印を押される。¹⁴⁾ このような状況の中で、ロレンスの英国社会に対する不信は、この時期から決定的なものとなっていく。Terry Eagleton はロレンスを「英国社会から疎外された作家の一人である」としている。¹⁵⁾ 第一次世界大戦は、実生活と作品の両方において、過去から断絶したユートピア的世界をロレンスに渴望させる契機となった。

1916 年 7 月、ツキディデス (Thucydides) の戦争史を読んだロレンスは、ペルポネソス戦争〔BC460-400〕の後、歴史の舞台から消えて行ったアテネの運命に、西欧文明の運命を重ね合わせている。

The Peloponnesian war was the death agony of Greece, really, not her life struggle. I am just reading Thucydides—when I can bear to—it is too horrible to see a people, adhering to traditions, fling itself down the abyss of the past, and disappear.¹⁶⁾

『恋する女たち』第8章、“Breadalby”で、ハーマイオニ、グドルーン、アーシュラの舞いを観ながら、ツキディデイスの本を手をしているのが、ロレンスの代弁者、バーキンである。

II

「歴史」としての戦争が作中に描かれていないように、「近代西欧文明の破綻」について具体的な描写が為されているわけではない。ロレンスが『恋する女たち』において、戦争に行き着かざるをえなかった「近代西欧文明の破綻」を如何に描いたかという、象徴的なエピソードの中に、また、バーキンの思想の中に、そして、ハーマイオニ、ジェラルド、グドルーンの人生が破綻していく様を通して、である。

この小説の中で、唯一破綻しないポジティブ・ヴァリューを体現しているのは、バーキンとアーシュラの関係と言える。アーシュラは、バーキンの説教者じみた態度を嫌ってはいるが、根本のところではバーキンに賛同するに至る。したがって、バーキンの思想に照らし、ジェラルド、ハーマイオニ、グドルーンの破綻が描かれている、ともいえよう。次章では、バーキンによって否定される、この三人の人物像について重点的に考察したい。この章では、その前に、バーキンがどのような人物像として描かれているか、ということと、近代西欧文明が破綻したと考えるバーキンの思想を検証する。

既に述べたように、ジェラルド、ハーマイオニ、グドルーンという三人の主要登場人物は、バーキンの価値観に照らして否定されてゆく。バーキンは「物語」の展開の鍵になる人物である。では、バーキンとは、一体何者なのか？ 謎に満ちたバーキン像を追っていくことにする。『恋する女たち』で語られていない、バーキンの出自や生い立ちについて、ここで注目しておきたい。

他の登場人物の描写と比較してみると、バーキンについての情報量の少なさは歴然としている。職業は小学校の視学官であるが、¹⁷⁾ その出自や家族構成について、作中で明らかにされることはない。『恋する女たち』以前

のバーキンについて仄めかされていることを、強いて三点挙げるならば、第一に、オックスフォード大学で教育を受けたらしいことがある。¹⁸⁾ これは、バーキンの新居の書斎に、カーペットを見立てようとするハーマイオニに「オックスフォードで使っていたトルコ製のもので十分だ」と言う場面 (137) から推測される。第二に、ハイデルベルグに滞在していたことが挙げられる。これは、一糸纏わぬ姿でジェラルドと“Japanese Wrestling”を組み合わせるシーンで、「ハイデルベルグに居た時、日本人のルームメイトから柔術を習った」とジェラルドに告げる (268) ことから分かる。しかし、滞在の時期や目的についての言及はない。第三に、退職後も 400 ポンドの収入が見込まれることがある。これは、「視学官を辞めても生活できるのですか？」とアーシュラがバーキンに尋ねることから明らかになる。(132) しかし、400 ポンドの出所については謎であり、それが、素性が明らかにされていないバーキンの家族や親戚からの遺産なのか、それとも Scott Sanders が考えるように年金 (annuity)¹⁹⁾ であるのか、作品からは判断がつかない。400 ポンドの出所が分かれば、バーキンの素性をある程度推察出来る筈だが、同時にそれは、「社会のシステムから受ける恩恵を元手に、バーキンとアーシュラの新しい生活が営まれる」ということになり、社会のシステムから今まさに逃れようとしている人物像との間に、矛盾が生ずる。従って、ロレンスはこの点を曖昧に書かざるを得なかった、と言えるかもしれない。それにしても、バーキンに関する情報は、バーキンの描写というよりも、彼の言動の端々から、何かの弾みで明らかになることばかりである。

バーキンの出自について語られていないのに対し、ジェラルドの生い立ち、受けた教育については詳しく書かれている。家族の描写という点でも、クライチ家の描写は他を圧倒している。そのことが、ジェラルド像を、よりリアルなものとしている。妹ローラの軍人との結婚式に始まり、結婚生活に不満を抱き続けた結果、時折常軌を逸したかのように陰しい表情を見せる母、クライチ夫人、幼少時、誤って弟を銃で撃ち殺した過去を持つカインとしてのジェラルド、水上パーティで溺死する妹ダイアナ、近づく死を受け入れようとせず、「生」にしがみ付く「温情主義的」炭坑経営者であ

る父、トマス・クライチ、「ポストモダン」を思わせる感情の欠落した妹ウィニフレッドなど、クライチ家は英国版 *Atreus* というべき様相を呈している。

ブラングウェン姉妹については、『虹』の終盤とのつながりが強く連想されるが、『恋する女たち』だけを見ても、姉妹の人物像に説得力を付加する家族の描写はなされている。ハーマイオニについても、貴族の家柄であること、父親や自由党議員の兄について説明され、レルケやハリディなどマイナーキャラクターについてでさえ、バーキンと比べると多くが語られる。

「通常の人物造形」という観点からすると、バーキン像はあまりにも物足りないように思われるかもしれない。しかし、これはロレンスが意図した範囲であったと考えることもできる。出自に関する描写がなされないことは、「階級や教育、宗教など、家族や社会生活についてまわる、旧い価値観から解き放たれた人物を想定している」為と考えられはしないだろうか。所属する階級に対する階級意識が強く、受けた教育をそのまま信じ、与えられた宗教に何の疑問も抱かない、既成の価値観に縛られた人物であるならば、バーキンが結んでいた交友関係はあり得なかったであろう。

考えてみると、バーキンの仲間というのは、ボヘミアンのハリディやミネットであり、貴族の館に集う進歩的とされる知識人のグループであり、長年愛人関係を結んでいたハーマイオニであり、産業資本家の友人ジェラルドであって、彼ら以外にはいない。バーキンは仲間でもあり、自分の一部でもあった彼らを否定することで、自分自身をも否定するという自己矛盾を導いている。それ故、カフェ・ポンパドールでボヘミアンのハリディ達に嘲られ、揶揄されることになり、アーシュラには、“*Salvator Mundi*” (*Savior of the World*) とか、プリーチャーなどと言われて攻撃されるのも無理もない。しかし、このようにロレンスがバーキンを「嘲りの対象」として描いていることから、バーキンの矛盾はロレンスの意図したことだと考えられる。自分の属していた集団から抜け出して、新しい世界を目指すという観点からすれば、『恋する女たち』は、バーキンにとっての「再生」

の物語ということも出来る。

新しい社会を目指すにあたり、バーキンも職業をやめていく。バーキンが何故視学官を辞めるに至るのか、小説におけるその意味を次に考えてみたい。ロレンスは、小説に視学官を登場させる構想を、まだ『虹』と『恋する女たち』が二つの作品に分かれる 1914 年、4 月の段階で、既に書簡に記している。²⁰⁾ 視学官がどのような職業であったのかを考える上で、イングランドにおける初等教育の歴史に目を向ける必要がある。

イングランドの初等教育が 1860 年代から法制化されていく背景には、第一に、ドイツ、アメリカへの立ち後れがあった。工業上の優位が失われることを恐れて初等教育が改善されていった経緯から、教育目的には「生産能率の増進」と「労働者のモラルの向上」が掲げられ、いかに国家に役立つ人間をつくるか、ということに重点が置かれた。視学官の仕事もアドバイザー的性格というよりも、特に 1862 年の補助金の「出来高払い制」導入以降は、「3R」の試験官的性質を強めていく。²¹⁾ 視学官も、教師も教育の理想とは程遠い、システムに組み込まれていくのである。

「出来高払い制度」が 1897 年に廃止されると、教育の理想として“self-expression”が掲げられるようになるが、第一次世界大戦の勃発が、教育理念を「規律」と「効率」一辺倒へと、押し戻すことになる。ナショナリズムが昂揚する戦時下の教育と教職について、ロレンスは、“Education of the People”で次のように述べている。

The War, however, brought us to our senses a little, and we ran the flag of citizenship up above the flag of self-expression. This was much easier for the teacher. At least now the ideal was service, not self-expression. “Work, and learn to serve your country.” Service means authority: while self-expression means pure negation of all authority. So that teaching became a somewhat simpler matter under the ideal of national service.²²⁾

教育の理想であるべき「自己表現」が、戦時下においては「国家への奉仕」

に取って代わられたと述べている。教育の目的を、国家に奉仕する人間をつくることだと見做す考え方は、『恋する女たち』において、炭坑主の跡継ぎで、“industrialism”の代表とも言うべきジェラルドが語る教育観——「教育とは体操のようなものであり、教育の目的とは、よく訓練された、強健で、活気ある精神を創り出すことではないか？」(85)——に見てとれる。

小学校の地方視学官であるバーキンは、教育制度を支える「社会理念」や「人間性」への不信、また、自らが教育界で仕事を続けることへの疑念をアーシュラとの会話において次のように述べる。

“If I find I can live sufficiently by myself,” he continued, “I shall give up my work altogether. It has become dead to me. I don’t believe in the humanity I pretend to be part of, I don’t care a straw for the social ideals I live by, I hate the dying organic form of social mankind—so it can’t be anything but trumpery, to work at education. I shall drop it as soon as I am clear enough—tomorrow perhaps—and be myself.” (132)

バーキンは、視学官という職業が自分にとって何の意味も持たないものとし、整理がついたら、仕事はすっぱり辞めるつもりでいると語る。実際、アーシュラとバーキンは結婚を決めるとその場で、夫々、辞表を教育委員会へ書き送り、教育界を離れていく。視学官と教師という公職から退く二人の行為は、英国の社会、教育システムの一歯車としての機能を果たすことへの拒絶を意味している。

次に、バーキンの思想が、どのようなものであったのか考察する。バーキンの思想の中核には「人間 (humanity) 嫌悪」がある。そこから、バーキンが理想とする男女関係を表す「星の均衡」(Star equilibrium) や、ユートピア (nowhere) の思想も生まれて来るのだが、ここでは、特に「人間嫌悪」を取りあげたい。作中ジェラルド、アーシュラを相手に幾度となく繰り返される、バーキンの「人間嫌悪」の発言を、幾つか追ってみる。次の引用

には、「人間を生きとし生けるものの長とするキリスト教的価値観の否定」も、見てとれる。

“Well, if mankind is destroyed, if our race is destroyed like Sodom, and there is this beautiful evening with the luminous land and trees, I am satisfied. That which informs it all is there, and can never be lost. After all, what is mankind but just one expression of the incomprehensible. And if mankind passes away, it will only mean that this particular expression is completed and done. That which is expressed, and that which is to be expressed, cannot be diminished. There it is, in the shining evening. Let mankind pass away—time it did. The creative utterances will not cease, they will only be there. Humanity doesn’t embody the utterance of the incomprehensible any more. Humanity is a dead letter. There will be a new embodiment, in a new way. Let humanity disappear as quick as possible.” (59)

このパラグラフの中盤でバーキンは、「計り知れぬ宇宙において、人間が、唯一絶対の表現者ということはなく、人間は、叡智を超えるものの一つの顕れに過ぎない」と述べ、パラグラフの終わりでは、“humanity is a dead letter” とし、人間は早急に退場すべきである」と語る。

次の一節では、冒頭、“Humanity itself is dry-rotten,” と述べられ、続いて、「人間はソドムの林檎」、「死海の林檎」であり、「林檎の中身は腐った灰である」と語られる。前記の引用に見られた「ソドム」のイメージがここでも、人間の運命に結びつけられている。

“The whole idea is dead. Humanity itself is dry-rotten, really. There are myriads of human beings hanging on the bush—and they look very nice and rosy, your healthy young men and women. But they are apples of Sodom, as a matter of fact, Dead Sea fruit, gall-apples. It isn’t true that

they have any significance—their insides are full of bitter, corrupt ash.”

(126)

次の引用にもバーキンの「humanity 嫌悪」は全面に出ており、「人間は間違いであった、消える時だ」と繰り返され、人間が消滅した風景に青々と広がる緑や、雲雀、兎、蛇などが、好ましく想像されている。そして、絶滅した古生物（魚竜）と同じように「人間も失敗作だ」と語られる。

“Do you think that creation depends on *man*! It merely doesn't. —There are the trees and the grass and birds. I much prefer to think of the lark rising up in the morning upon a humanless world. —Man is a mistake, he must go. —There is the grass, and hares and adders, and the unseen hosts, actual angels that go about freely when a dirty humanity doesn't interrupt them—and good pure-tissued demons: very nice.”

.....

“If only man was swept off the face of the earth, creation would go on so marvelously, with a new start, non-human. Man is one of the mistakes of creation—like the ichthyosauri. —If only he were gone again, think what lovely things would come out of the liberated days; —things straight out of the fire.” (128)

バーキンはいわば「極論」を主張し続けることで、近代ヨーロッパ社会において人間が“degenerate”したことの危機感を表明している。次に、人間が“degenerate”していく様がどのように、主要登場人物の中に見られるのかを考察する。

III

ジェラルドについては、まず、その名前について触れておきたい。『恋する女たち』の女性登場人物の名前が象徴的である、という指摘は、よくさ

れてきたが、²³⁾ ロレンスは男性登場人物の名にも、シンボリックな意味を込めたと思われる。特に、“Gerald” という名は “Old German” の “Gairovald” に由来していて、“ger” (spear) と “vald” (rule) の複合語である。²⁴⁾ 「槍を振りまわす人」 (spear wielder) の意味があり、作中、幾度となく “soldier” と結びつけられるジェラルドのイメージ——“He was in the last war.” (64)/“how beautiful and soldierly his face was.” (58)/“soldierly laugh” (59)/“his air of soldierly alertness” (162)/“He longed to go with the soldier to shoot the men.” (226)/“The days of Homer were his ideal, when a man was chief of an army of heroes.” (294)——を体現している。

ジェラルドは自らの理想を、ローマ帝国の栄光のために生きた “Roman Soldier” に求めている。(“One should die quickly, like the Romans,...”) (284) この言葉は、ローマ人のストイシズムを思わせるが、ローマ帝国の栄光が、頹廃と表裏一体であったこともよく知られている。『恋する女たち』の “Threshold” の章で、ジェラルドから、“Best to dance while Rome burns, since it must burn.” (287) と言われたグドルーンは、“the abandonments of Roman license” (287) を思い浮かべる。

「温情主義者」である父に代わり、ジェラルドは炭坑の機械化、合理化を進めた、いわば “a Napoleon of Industry” (64) である。効率的な組織をつくりあげ、「産業王」として君臨するジェラルドにとって、労働者は工場を動かす為に必要な「物」であり、自分自身のことも巨大な “mechanism” の「一歯車」にすぎないと見做している。実際、彼がいなくても、工場は完璧なシステムの下で活動が続ける。社会的な成功は収めたものの、ジェラルドは自らの「生」の空虚さに悩まされることになる。鏡に映る自分の姿に、呆然と立ち尽くすジェラルドの描写は、存在価値を見失った彼の虚無感を、象徴的に表している。

...he went to the mirror and looked long and closely at his own face, at his own eyes, seeking for something. He was afraid, In mortal dry fear, but he knew not what of. He looked at his own face. There it was, shapely

and healthy, and the same as ever, yet somehow, it was not real, it was a mask. He dared not touch it, for fear it should prove to be only a composition mask. (232)

ジェラルドはグドルーンとの関係においても行き詰まってしまう。行き場を失ったジェラルドは、最後にはチロルの雪山で自殺し、“a frozen block”として“the great Cul de sac of snow and mountain peaks” (401) に果てる。一齒車のようにレルケと交換されるのは我慢がならず、かといって障害物を取り除くようにグドルーンを殺せるか、というとそれも出来ない。ジェラルドは自分の人生の行き止まりに辿り着いてしまうのである。

ハーマイオニは、知識人から成る知的サロンのような集団の、中心人物的存在で、自由党議員の兄を持つ。自分の知性への奢りを象徴するかのような大きな帽子をいつも被っている。しかし、内面は空虚で、結局は“Mammon”の崇拝者 (293) に過ぎない。愛国心についての議論において、「帽子を奪われそうになったら、どうするか」とジェラルドに尋ねられると、「その時は、相手を殺してでも帽子を守る」(29-30) と笑う彼女の姿勢は、ジェラルドの戦争観に、根本のところであつながつている。表向きは、「改革に情熱を燃やし、人々の為に心を砕く」知識人 (16)、ハーマイオニの内面は、破壊的な欲求に満ちている。自分の思い通りにならなければ、暴力に訴えることをも厭わない。理性を働かせることより、暴力が先にくるのである。それが端的に表れるのが、彼女がバーキンの頭に文鎮を振り下ろす場面である。バーキンを殴ったのはやむを得ないことで、バーキンはそうされるだけのことをしたのだと、暴力を正当化する。(She became rapt, abstracted in her conviction of exclusive righteousness.) (109) ハーマイオニの「暴力の正当化」には、戦争遂行の論理に荷担した「知識人」や、「貴族」の姿が見てとれるのである。

グドルーンは、小説が始まってすぐ、アーシュラに次のように言う。“Don’t you find that things fail to materialise? *Nothing materialises!* Everything withers in the bud.” (8) 何事も結実しない不毛の時代を見通しているこの

言葉からも分かるように、グドルーンは、物事の本質を見抜く鋭い感性を備えている。しかし、彼女は傷つくことを恐れ、自分をさらけ出すことはない。小さなものばかり彫刻するグドルーンの“subtleties”は、アーシュラには「弱さの印」(a sign of weakness) (39) としか映らない。彫刻家としては、ある程度の社会的成功を収めたように見えるグドルーンも、内面の空虚さという観点からすると、ジェラルドやハーマイオニと変わらない。一瞬一瞬を感覚的に生きているが、自分は「人生の傍観者である」という意識に、常に苦しめられてもいる。ジェラルドを死に追いやった後、「かつては教会の為に仕事をした芸術家のように、自分は産業の為に仕事をする」(424) というフューチャリスト的彫刻家、レルケと共にドレスデンへ消えていく。

グドルーンの描写には、戦時下の芸術家像を見ることができるだろう。挙国一致体制の下で、芸術家が戦争擁護にまわるのは、当時珍しいことではなかった。それは何も芸術家に限ったことではなく、例えば、参戦二日前に、反戦デモを繰広げていた労働党が、開戦と同時に戦争擁護にまわったことは周知のことであるし、戦前、戦闘的女権運動を繰広げていた女権論者も同様であった。キャサリン・マンスフィールドの夫で、『ドストエフスキー論』で名を上げた、ジョン・ミドルトン・マリは、戦争省 (War Office) に翻訳の仕事を得て、羽振りよく暮らす道を選んだ。²⁵⁾

ここまでのところで、ロレンスが『恋する女たち』の中に、「戦争」と、「近代西欧文明破綻」を、ジェラルド、ハーマイオニ、グドルーンという登場人物を通してどのように描き込んだか考察してきた。ジェラルドは産業界の、ハーマイオニは知の世界の、グドルーンは芸術の分野での代表者として考えた時、人物の破綻は、夫々、産業界、知の世界、芸術の世界の破綻を象徴している。バーキン自身は、アーシュラと共に「再生」への道へと出発していくことになる。

次に、ロレンスが「近代西欧文明の破綻」と「再生」をどのようなイメージとして描いたのか、もう少し詳しく見て行くことにする。「近代西欧文明の破綻」と「再生」のイメージは、象徴的な木の描写に織りこまれている

ように思われる。作品の中で、人間は「朽ちゆく木」として描かれており (Mankind is a dead tree.) (186) そして、ハーマイオニは「朽ちゆく木」にぶらさがり木葉である。(She was a leaf upon a dying tree./she was a leaf of the old great tree of knowledge, that was withering now.) (293) 「破綻をきたした文明」における、人間は「朽ちゆく巨木」に喩えられ、「再生」のイメージは、「幼木」に託されている。ハーマイオニに殴られたバーキンが向かう先は、草花が咲き、背の丈の若木が群生する丘である。草花や「樺の木」と戯れるうち、バーキンは“vegetation”の中に「新しい世界」を発見し、そこに自分の世界を見出す。(107-8) バーキンという個人の「新生」のイメージが、木に託されているようにも思われる。アーシュラとバーキンが、シャーウッドの森で一夜を明かす場面にも、木のモチーフは見てとれる。鬱蒼と聳え立つオークの木の下で下草が枯れる道を通り抜け、バーキンが車を停めるのは、緑が広がる開けた場所である。(319-20) また、雪に囲まれた不毛の世界を、立ち去ることを決めたアーシュラが、思いを馳せるのは「オレンジ」や、「枝垂れ糸杉」、「オリーブ」、「西洋柃」(434) といった、背の低いイタリアの木々である。

ジェラルドは死の前日、南の谷の向こうに広がる「松の木々」を見て、“the old Imperial road” (460) が故郷へと通ずることを考えるが、自分は雪山に永遠に留まる決意を固める。数日後、バーキンはジェラルドが息絶えた場所から、遙か南に「松の群生」を認め、イタリアへと通ずる “the great Imperial road” (478) をジェラルドは下っていくこともできたのに、と思う。しかし、同時にその道を辿っていくことが、“a way out”ではなく、“a way in”でしかないことも分かっている。そして、“the old, old Imperial road” (478) を下ることが果たして正解であるのか、と自分自身に問いかける。

最後に、レルケについても触れておきたい。バーキンによって “that little dry snake” (454) と呼ばれるレルケは、“degenerate”した人間の行く先を具現したような人物像である。その名は、グドルーンと同じく、北欧神話からきており（不和と悪事を企む火の神 “Loki”）、人間ではなく「小

人」“the little people” (426) のイメージで描かれている。彼は「少年のような体つき」(405) に「老人の顔」(422) をした “an odd little boy-man” (468) であって、“a troll” (405), “a gnome” (411), “elf-like” (468), “a pixie” (468) などとバーキンや、ジェラルドに言われる。その手は人間のものとは思われず、鉤爪や蹴爪を持ち小鳥を驚掴みにする、猛禽類のもののようなのである。(prehensile) (422/457)/(talons, griffes) (423) 彼はまた、鼠や、蝙蝠、兎などの小動物にも喩えられる “an odd creature” (405), “some strange creature” (427), “the little creature” (454) であって、人間というよりも “insect” や、“vermin” に近い生き物のように描かれる。グドルーンは、ジェラルドを見限ることで「新世界」を求めたアレキサンダー大王 (the Alexander seeking new world) (452) となるような気持ちになるが、しかし既に「新世界」など、どこにも存在せず、これからはレルケのような者たち “little ultimate creature” (452) だけが、生き延びていくことを悟っている。未来は、想像を超えるレルケのような存在が、生きていく世界として想像されるのだから、「物語」は結末の定まらぬ “unsettling” なものとして終わらざる得ない。レルケがグドルーンと共に思い描き、せせら笑う「未来図」は、預言的である。

...a man invented such a perfect explosive that it blew the earth in two, and the two halves set off in different directions through space, to the dismay of the inhabitants: or else the people of the world divided into two halves, and each half decided *it* was perfect and right, the other half was wrong and must be destroyed; so another end of the world. (453)

「再生」の道を考えながらも、人間とは思えぬ不気味な姿をしたレルケを小説の終盤に登場させたところに、ロレンスの、鋭い目が感じられる。

おわりに

ロレンスは『恋する女たち』で、イギリス社会全体が、ごく少数の人々

を除いて、戦争遂行の論理に組み込まれる様をジェラルド、グドルーン、ハーマイオニのような登場人物を通して描きだした。そして、バーキンによって、それらの登場人物を否定させることで、戦争拒否を貫く自らの姿勢を表明した。

バーキンの姿勢というのは、戦時下の体制側にも与せず、かといって労働者としての権利を主張する、労働者の思想に与するものでもない。労働争議に対しては「*pianoforte*」を持つことに何の意味があるか」と言い、労働者の蜂起を“*material gains*”の要求として退けている。しかし、次に何ができるか、という具体的な案があるわけではない。差し当たりはっきりしていることは、「現状に対する拒否感」であり、「体制に加わらないという意思表示」である。アーシュラと理想の関係を築きあげることにより、「生」の充足を達成しようとするが、一方で、男性同士の完璧な友情を、自分が否定する生き方をする「産業王」ジェラルドに求め（“*I believe in the additional perfect relationship between man and man.*”）(352)、その死に向き合っても、構築できた筈のジェラルドとの関係に未練を残す、という矛盾に終わっている。バーキンの求めたものが「非現実」への逃避で、荒唐無稽であるという一言で片づけることはできない。暴力と破壊の世紀の始まり、チャーチルをして「人類は、それによって彼ら自身の絶滅を確実に達成できるような道具を、初めてその手にした」²⁶⁾と言わしめた、未曾有の第一次世界大戦に対して、ロレンスは、敢然と拒否の姿勢を貫いた。バーキンがジェラルドに対して“*What do you live for?*” (56)/“*What do you think is the aim and object of your life?*” (57) と問い続けたように、生涯、自らに人間の「生」の意味を問い続けた。

（本稿は2001年12月1日に、東洋大学で催された、第35回大学院英文学専攻協議会での発表原稿に、加筆訂正したものである。）

Notes

テキストはペンギン Cambridge 版を使用。D. H. Lawrence, *Women in Love*. Eds. David Farmer, Lindeth Vasey and John Worthen. Intro., Notes by Mark Kinkead-Weekes. Harmondsworth: Penguin, 1995. 括弧の中に示した引用の頁は、全てこの版

による。

- 1) Graham Holderness, *D. H. Lawrence: History, Ideology and Fiction*. Dublin: Gill and Macmillan, 1982. 199.
- 2) H. M. Daleski, *The Forked Flame*. 1965. Madison: U of Wisconsin P., 1987. 127.
- 3) “Foreword to *Women in Love*” は、ペンギン Cambridge 版テキストの 485-6 頁に収められている。引用箇所は、485 頁。
- 4) *フューチャリズム：20 世紀初頭の特に詩と絵画に見られた芸術運動。イタリア詩人、マリネッティによる「未来派の宣言と創設」がフランスの「フィガロ紙」に掲載されたのは 1909 年 2 月。ダイナミズム、スピード、エネルギーの強調、機械賛美、動力機関の偏愛が特徴的。(Britannica) ロレンスは 1914 年に、フューチャリズムの画家や詩人の作品を目にした。LDH 731. *The Letters of D. H. Lawrence*. Vol. II: 1913-16. Eds. George J. Zytaruk and James T. Boulton. Cambridge: Cambridge UP, 1981. 180. フューチャリズムとロレンスのつながりに関しては、Mary Freeman が詳しく論じている。Mary Freeman, “Lawrence and Futurism.” *D. H. Lawrence: The Rainbow and Women in Love*. Ed. Colin Clarke. Macmillan: London, 1969. 91-103
*ニジンスキー (1890-1950) がディアギレフ主催の「バレエ・リュス」の花形ダンサー、振り付け師として活躍するのは、実質的には 1909 年から 10 年間であった。1919 年から強度の精神分裂病を患い、その後亡くなるまで回復することはなかった。(Britannica)
*ピカソ (1881-1973) 「青の時代」(1901-1904)、「薔薇の時代」(1905-1906)。1906-1907 年にかけて、セザンヌやアフリカ彫刻の影響を受けた後、1907-1908 にブラックらとキュービズムを創始。1917 年から 1924 年まで、ディアギレフ・バレエ団の舞台装置、衣装担当も務めた。(Britannica)
- 5) *Vogue* がアメリカからイギリスに入ってセンセーションを巻き起こしたのは 1916 年のことだった。それまでのイギリスの女性誌が伝統的な性の役割に基づき、母親、主婦中心の紙面作りだったのに対し、女性の関心は、母親や主婦としての関心だけではないという考えに基いて、女性の権利や教育についての記事を掲載した。Clive Bloom, *Literature and Culture in Modern Britain*. Vol. 1: 1900-1929. London: Longman, 1993. 85.
- 6) 『恋する女たち』のペンギン版 (Charles Ross 編注、1989) の注によると、第一次世界大戦中 Kaiser は、“Ich habe es nicht gewollt” という発言を繰り返していたという。ペンギン Cambridge 版の注には、Kaiser のこの発言が、第一次世界大戦勃発一年後に刊行された manifesto に載ったことが書かれている。
- 7) “Industrial Magnate” に描かれる労働者像をめぐるっては、様々な解釈が為されている。*Scott Sanders は、機械化された炭坑の工場の「一歯車」として描写される労働者像に、兵士の姿を重ねる。資本主義の論理が、労働者を「物」として扱うように、戦争も、兵士を「物」へと、“dehumanize” するのだと主張する。Scott Sanders, *D. H. Lawrence: The World of the Major Novels*. London: Vision Press, 1973. 109. *John Worthen は、機械化された工場で黙々と働く労働者の描写は、「歴史」ではなく、労働者の心の動き——キリスト教的人道主義に基く、トマス・クライチの「家父長的価値観」よりも、「資本主義」の論理を選択した——を描いた「神話」(a myth) であるとする。John Worthen, “*Women in Love: The Ideology of Society*.” *D. H. Lawrence’s Women in Love*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1988. 71.

- 8) 山上正太郎『歴史・人間・運命 [II] 現代編——大戦の時代』東京、文元社、2000年。54頁。
- 9) Ibid., 58頁。
- 10) *Movement of European History* の“Epilogue”で、ロレンスは人類を「老いた巨木」に喩え、ヨーロッパ文明の「枝」の成長点は、第一次世界大戦によって砕け散ったと述べた。過去100年間、“Liberty”, “Equality”, “Fraternity” という理想を掲げ、“Progress”, “Expansion”, “Equality of Opportunity”, “Free Competition” を実践した結果が戦争であるとした。「帝国の論理」が戦争を引き起こしたことを、木の成長になぞらえて、木の枝がそれぞれの、生き残りをかけ、陽光を求めて争うように、様々な人種の「枝」も闘うことになるのは、自明であるとしたのである。D. H. Lawrence, “Epilogue.” *Movements in European History*. Oxford: Oxford UP, 1971. 307–21.
- 11) LDH 1435, To Waldo Frank, 27 July 1917. *The Letters of D. H. Lawrence*. Vol. III. 1916–21. Cambridge: Cambridge UP, 1984. 143.
- 12) LDH 1303, To E. M. Forster, 6 November 1916. Ibid., 22.
- 13) ‘Response from publishers’ in “Introduction.” *D. H. Lawrence: The First Women in Love*. Eds. John Worthen and Lindeth Vasey. Cambridge: Cambridge UP, 1998. xxxiv–xxxix.
- 14) 3回の徴兵検査の体験は、夫々、書簡の中に記されている。*LDH 1250, To Dollie Radford, 29 June 1916. *The Letters of D. H. Lawrence*. Vol. II. 618. *LDH 1426, To J. B. Pinker, 25 June 1917. *The Letters of D. H. Lawrence*. Vol. III. 135. *LDH 1642, To Catherine Carswell, 26 September, 1918. *The Letters of D. H. Lawrence*. Vol. III. 288.
- 15) Terry Eagleton, *Exiles and Emigre: Studies in Modern Literature*. London: Chatto & Windus, 1970. 191–218.
- 16) LDH 1245, To Barbala Low, 30 May 1916. *The Letters of D. H. Lawrence*. Vol. II. 614.
- 17) Ian MacKillop は、Birkin が視学官であったことに注目し、ロレンスがまだ教職にあった1911年に議会で巻き起こった、視学官にまつわるエピソードを『恋する女たち』の一場面と結び付けている。Ian MacKillop, “Women in Love, Class, War and School Inspector.” *D. H. Lawrence. New Studies*. Ed. Christopher Heywood. London: Macmillan, 1987. 46–58.
- 18) 小説の冒頭部分として書き始められたが、1917年には削除されていた “Prologue to *Women in Love*” では、バーキンがオックスフォード大学を卒業したことが、明記されている。“Prologue to *Women in Love*” はペンギン Cambridge 版の『恋する女たち』、499–516頁に収められている。
- 19) Sanders, 120.
- 20) 当時は、*Wedding Ring* として執筆が進められていた。LDH 718, To Edward Garnett, 22 April 1914. *The Letters of D. H. Lawrence*. Vol. II. 164.
- 21) 「出来高払い制度」については、勅任視学官を務めた Matthew Arnold の “The Twice-Revised Code” (1862) を参考にした。英文オリジナルが、以下の本に収められている。マシュー・アーノルド『再改訂法典——出来高払い制批判——』小林虎五郎訳。東京、東洋館出版社、2000年。148–79頁。
- 22) D. H. Lawrence, “Education of the People.” *Reflections of the Death of a Porcupine and Other Essays*. Cambridge: Cambridge UP, 1988. 95.

- 23) ペンギン Cambridge 版テキスト注によると、*Gudrun は北歐伝説の、Nibelungs 王の娘で、フン族の Atli の妻。夫殺し。*Ursula は、紀元 300 年頃、Cologne でフン族に攻められ、11,000 人の処女と共に殉教したと言われる伝説的な王女。
- 24) E. G. Withycombe, *The Oxford Dictionary of English Christian Names*. Oxford: Oxford UP, 1963. 124.
- 25) F. A. Lea, *The Life of John Middleton Murry*. London: Methuen, 1959. 54-5.
- 26) ロバート・ペイン『チャーチル』佐藤亮一訳。東京、法政大学出版、1993。182-3 頁。チャーチルが 1928 年に記した『世界の危機』からの引用である。